

胃がん体験談

私は毎年の集団健診で、胃の透視を受けたり、子宮がんの検査を受けていました。でも時には2年ほど受けなかった時もありました。

平成17年の春頃から、食べたものが何かすつとのどを通らない気がして、時々置き薬や薬局の胃薬を買って飲んでいましたが、これではだめだと思い、かかりつけの医院で胃カメラを飲んでみることにしました。検査の結果胃がんが見つかり、早速日赤病院を紹介していただき、そこで最初の一週間は検査で、次の週には手術を受けることになりました。主人や子ども達に励まされながら、麻酔をされて意識が薄れていくなかで、すべてを先生にお任せしました。

術後、麻酔が覚めて家族の顔が見えて大丈夫？といわれた時にはわけもなく涙が出てとまりませんでした。

二日目からおしっこの管をはずして、看護婦さんから「自分でトイレに行くように。それがかえって内蔵の機能が働くんだ」といわれたので、点滴をしながらトイレに行きました。

外科病棟には胃を切った人、胆のうをとった人、さまざまな患者さんがいて、皆さんの互いに傷を見せあいながら早く元気になるうねと、励ましあったものでした。

一ヶ月ほど入院して、自宅に戻り、それからは自分の食べる物は自分で作り、毎日の食事日記、体調日記は2年以上たった今も書き続けています。バランスの取れた食事と適度な運動、仕事と今では手術したこともたまには忘れる程いろいろな場所へ出かけています。

かかりつけの先生に時々検査していただき、先生を初め、家族や親戚、友人のおかげでこうして生きていられることに日々感謝して、常日頃から自分の健康チェックをしておくことが大切だと思っています。それにはやはり集団健診で早期発見することが一番ではないかと思えます。



大腸がん体験談

私は市のガン検診を受けず恐怖を体験し、大変悔しい思いをし後悔しています。あの頃、毎日毎日が忙しくて検査を受ける気持ちは全くありませんでした。顔色が悪いよと、言われれば「寝不足だよ。」と、痩せたね。と、言われれば、「しっかり食べて痩せるのだからうれしいよ。」と、まさか自分の身体の中を癌が住み着いているとは夢にも思っていません。大便をした後、何となく拭いた紙を見てみると、血の色と便の色とが混ざった変な色。ヌルツと、ネバツとした物も付着していました。「もしかしてガン！」そう思いながら、病院へ駆け込みましたが、大腸の検査ってどうするのか、不安で不安でなりません。便を持ってくる様に言われたので既に自分の目で見た便の状態をお話しました。何と先生の血相が変わりガンを直感。さっそく入院検査を強要されその結果悪い状態で大腸を破って貫通。血液とリンパに癌の細胞が入っているとの想定で手術を行ったそうです。

手術後は抗がん剤投与。辛くて辛くて、食事を口に入れても全部吐いてしまい、体重が減ってベットから起き上がれずとにかく食べられないのが悲しいです。そんな時、リンパ癌で苦しんだ友人が教えてくれたのです。「食べられる物は探せば何かあるよ。頑張って口から入れ込んだ方がいいよ。」

それからは何でも口に入れる様努力してみました。体重も少しずつ戻り体力も付き病院内を歩く事が出来ました。調子の良い時は外出して気分転換。一時は心の中も荒れに荒れて、どうでもいい、どうでもなれ！と・・・

人間は弱いものですね。怖くて苦しくて、どんなにか家族や回りの人達が心配し親切にしてくれても、私には満足ではありませんでした。分かって貰えないものがあり怖かったのです。同じガン体験をした人達、友人と語り合っている時の方が何かしら救われた様に思う。

私は今、すごく充実しています。一日の時間が足りないくらいの毎日です。時間が勿体無いのです。癌の怖さから逃れるために忘れるために、楽しみを作って毎日過ごしているのかも知れません。

今年で丸四年が過ぎ早いものです。油断は出来ません。手術一年目で新たな進行悪性癌が五個、二年目には三個ありました。早期発見で内視鏡による摘出。色々な工夫をして三年目、四年目は、何も無く元気に過ごしています。すごく感謝しています。家族に支えられながら・・・。

個人が特定できる情報は省略してあります